

粘土造形学習の今日的情況：その課題と問題点

— 千葉市立小学校でのアンケート調査より —

神 谷 睦 代

A New Curriculum for Art Education 3

Clay Work Activities: Perspectives and Problems

— Results of Questionnaire Conducted at Elementary Schools in Chiba-city —

Mutsuyo KAMIYA

粘土を用いた造形活動は、現代の教育目標に照らし合わせても、大きな教育的意義と可能性を持ち合わせている。だが、油粘土や紙粘土に比較して、本来塊の魅力を最大に生かせる天然の粘土はやや敬遠されがちである。そこで、再度粘土を用いた造形のよさや特質を提言するためにも、まずは全般的な粘土造形の実態を知るためにアンケートによる調査を行った。本稿では、結果とその具体的な様子を考察することで、問題点と今後の課題を明らかにする。

I 問題と目的

粘土を用いた造形学習¹⁾は、明治時代から行われその歴史は長い。しかしながら、粘土を用いた造形の具体的な教育的意義や実践を研究としてまとめた事例は、絵画に比べても僅かである。

代表的なものとして、上野省策・梶田幸恵著「粘土細工から彫塑教育へ」²⁾が挙げられ、その他では、平野節子による「いのちを見つめる図工の授業」³⁾がある。これらの本では“粘土の常識をくつがえす”ひねりだしの手法が紹介されているが、特に「いのちを見つめる図工の授業」では、平野氏の実演と子どもの活動の様子が写真や図で示され、手に取るように授業の様子が伝わってくる。また粘土の保管の仕方まで具体的に解説されており、指導のノウハウを知る上でもすこぶる画期的な内容であった。とは言うものの、前者は1980年に、後者は1990年にそれぞれ出版されており、その後今日まで粘土を用いた造形に関する研究や著書はほとんどみられない。このことは、粘土を用いた造形のよさや教育的意義を衰退消滅させてしまうのではないかと危惧さえ感じる状況である。また、危惧する理由として、筆者は短

大で造形表現や図工の講義を担当しているが、小学校時代あるいは幼稚園や保育園でも粘土に触れた経験を持つ学生が格段と少ないことが挙げられる。彼らにとっての粘土といえば、大体が「油粘土」のことで、素材経験が偏っている事実が浮かび上がってくる。

粘土を用いた造形の教育的意義は、平野節子が、前述の著書の中でモーリス・ドベスの言葉を引用し「子どもの持つ、子どもらしいエネルギーを『土粘土』で一気に爆発させたい⁴⁾」と語るように、その可塑性からも子どもにとって、自由な表現を保障する教材であり、特に素材体験をしながら全身でとりくめるという点では、絵画や工作的な内容にはない魅力を持っている。

また、現代美術の拡大と共に「造形遊び」が導入されてからは図工の題材も様々な手法や材料が取り入れられるようになったが、粘土を用いた造形もその一つとして現代的な教育目標を達成する上で大いなる可能性をもった教材と考える。ちなみに、平成14年度に改定された図工の教科書⁵⁾を見てみると、粘土造形の題材は低学年から高学年までの6冊あるすべての教科書に取り上げられている。その内容は人物や動物をテーマにしたひねり出し中心の塑造から、器や花瓶などの焼き物作品までと幅広く扱われている。

筆者はこれまで過去5年に亘り図工の表現活動を土台にした「総合的な学習」の研究⁶⁾に携わっているが、「ものづくり」「体験学習」「特色のある学校づくり」等、今日キーワードとされている教育課題に応える授業作りに、粘土は中心的な素材として活躍している。

そこで、今一度粘土を用いた造形の可能性を提言するためにも、まずは現場でどのように粘土造形が行われているかの調査を行うことにした。本稿では、調査の結果とさらに教師の指導観も合わせて考察し、それによって、粘土造形の今日的情況を明らかにし、その問題点と課題を導き出していきたい。

Ⅱ 方法

(1) 調査の対象

千葉市内小学校103校を対象に行い、各学校の図工科主任にアンケートの回答を依頼した。

(2) 調査日 2002年6月17日

(3) 調査の視点

アンケートの内容は、まず図工の授業で粘土をとりあげる頻度、続いて教材として使用する粘土の種類とその理由をたずねた。指導の観点からは、粘土を用いた授業の良さや、一方で不便な点・問題となる点を指導者と児童それぞれの立場からたずねた。

また、過去に実践した題材の内容と完成した作品の後始末についても質問し、粘土を用いた活動が全体的に見渡せるようにアンケートを行った。

さらに、新教育課程の施行で授業時数が削減された本年、背景となる図工学習全体の実情

を把握することも必要と考え、図工の授業そのものに対する意識や見解も同時に調査した。

(4) アンケートの内容

図画工作科アンケート

差し支えありませんでしたら、校名をご記入下さい。

(千葉市立

小学校)

1 粘土造形について

① 図工の授業で、粘土をういますか？ (○で囲む)

ア よく用いる イ 時々用いる ウ 余り用いない エ 用いたことが無い

② ①の理由をお書きください。

③ 教材として用いる粘土の種類は？ (○で囲む・複数回答可)

ア 紙粘土 イ 加工粘土 ウ 油粘土 エ 土粘土 オ 陶芸用粘土
カ その他 ()

④ ③の理由をお書きください。

⑤ 粘土を用いた授業での、良い点についてお答えください。

(指導者の立場から)

(児童の立場から)

⑥ 粘土を用いた授業での、不便な点又は問題となる点をお答えください。

(指導者の立場から)

(児童の立場から)

⑦ 過去に実践した、粘土を用いた題材をお書きください。

(例： 3年 紙粘土による動物

4年 陶芸用粘土によるお面づくり。焼成の後彩色。)

⑧ 完成した作品はどうしていますか？

2 図工の授業について

① 図工の現実的な状況について、気になることは何ですか？ (○で囲む・複数回答可)

ア 授業時数 イ 内容 ウ 教科書 エ 教材にかかる費用 オ 作品の処理
カ 児童の態度 キ 設備 ク コンピューターの利用 ケ その他 ()

② ①の具体的な様子をお書きください。

(例： (ア) 準備と後片付けの時間をいれると、集中して活動に取り組むのが
困難。できる題材が限られてしまう。)

③ 学校全体で取り組む、図工的な内容のイベントがありましたらお書きください。

(例：春の絵を描く会)

- ④現在の社会や、新教育課程の目標「生きる力の育成」を背景にしたとき、図工科では、児童にどのような学習効果を期待できると考えますか？

(例：ものを作ることを通して、バーチャルでない現実的な視野を獲得する。)

Ⅲ 結果

○回答小学校名（千葉市立小学校：103校）

更科・横戸・千草台・大巖寺・若松・みつわ台北・千城・長作・誉田東・生浜東・鶴沢・白井・千城台旭・柏井・登戸・あやめ台・金沢・星久喜・北貝塚・寒川・幕張・第二養護・あすみが丘・磯辺第三・平山・幕張東・扇内・海浜打瀬・轟町・小倉・真砂第三・越智・こてはし台・大木戸・磯辺第二・松ヶ丘・小中台南・高洲第二・宮崎・緑町・土気南・大宮・真砂第二・幸第一・真砂第四・花見川第二・犢橋・小谷・朝日が丘・小中台・西の谷・上の台・花身川第四・宮野木・稲毛二・弁天・草野・若松台（以上58校）

（無記名45校）

1の① ア イ ウ エ

11 76 14 1 （無回答1）

②理由：（ ）内は複数回答人数

（ア）子どもたちの心が落ち着く。

気持ちが表現しやすい。

粘土のよさを教えたい。立体感覚を養う。(4)

短時間で仕上がる。

指先をつかい子供たちによい刺激となる。(3)

取り扱いが楽、手軽。(3)

個人用があり、いつでも使える。(2)

（イ）自由に形が作れる。やり直しができる。(9)

子どもたちが好き。興味関心がある。(28)

カリキュラムに題材としてあるため。(年に1回)

教科書に載っている。(16)

1年に1回は取り上げたい。(4)

創造性を高めるのに効果的。

中学年までは工作に用いることが多い。

塊として捉えられる（平面ではできない）。

発達段階にあわせ色々な場面で利用できる。

年2回から1回。

イメージを形にしやすい。絵より扱いやすい。(4)

感触を味わわせたい。

(ウ) 後始末が大変

粘土が高い。(2)

共用して使える粘土がない。(2)

完成作品の処理が大変。

教科書に余りのってない。

低学年は、各自油粘土をもっているが、中高年は改めて買わなくてならない。

作品や残土の処理。価格。保管の困難さ。作品の置き場がない。

(エ) 初任だから。

特に理由がないが、時間的余裕・値段・作品として壊れやすく残らない。

低学年は頻繁に。高学年は時間的余裕がない。一つの作品を完成するのに時間がかかる。

③	ア	イ	ウ	エ	オ	カ
	57	22	73	60	20	4 (小麦粉粘土) (液状粘土)

④ (ア) 作品として残る。(2)

軽くて使いやすい。(7)

工作でも使いやすい。(3)

色がぬれる。(2)

他の教科との関連・工作と兼ねて。

(イ) 加工粘土は壊れにくい。

(ウ) 1年生から持っている。(6)

油粘土は安価で保存が簡単。また、通年、年越しで使用できる。(6)

繰り返し使える。(10)

子どもが喜ぶ。集中する。(4)

使いやすい。(9)

油粘土でイメージづくりを練習させる。

常時学校にある。(2)

主体的に取り組む。

発達段階的に油粘土が適している。

(エ) 立体感をつかめる。自由に発送しイメージを膨らませさせる。(3)

重い感じが出しやすい。

固めて保存できる。

感触が良い。(4)

造形しやすい。(2)

扱いやすい。練りやすい。(9)

安価。(2)

身体全体を使って表現することに向いている。(2)

土粘土は使いこなすのに訓練が必要と感じている。

私（教師）が好き。

使った後元に戻し霧吹きをかけてタオルに包み、ビニールに入れておけば何度でも使える。

土を味わう。(3)

学校で常備。

再利用できる。

(オ) 題材としてあるため。

5年生は焼き物に挑戦する。

高学年では陶芸のため。(陶芸)

⑤（指導者）何度も作り直しができる。子供が失敗を恐れない。(14)

楽しい（指導ができないが）。(6)

思い切った作品作りができる。子どもの興味関心が高い。(7)

手のひら、指先を使っていろいろな形が作れる。(3)

立体的な造形活動を行うのは必要。立体の意識を養う。(4)

満足できるまで繰り返しできる。

立体の感じをつかませることができる。

子どもたちが意欲的に活動できる。(7)

自由な発想で形がつかれる。形がすぐに変化して面白いから。(13)

絵よりも表現しやすい。

子供の心を素直に表現させられる。(2)

手触り、ベトベトの感覚が良い。(3)

絵が苦手な子も粘土は好んでやる。(2)

普段は気づかない能力を発揮する。

粘土造形学習の今日的状況：その課題と問題点

子供の満足感が大きい。(2)
見本が作成しやすい。
作りたいものを立体で表現させることができる。(2)
集中して静かにできる。(2)
土に触れる機会を持たせたい。(2)
感動体験がすばやくできる。(そのための技術指導が必要)
指先を器用にさせる。(2)
短い時間で仕上がる。
身体全体でこね動きを楽しむ。(3)
子供同士良い点がみつけやすい。

(児童) 楽しい・夢中になれる。(10)
手触り、触感が楽しめる。(13)
やり直しができる。(8) 手軽。(2)
こねたり、つかみ出したり、ひねりだしたりして作る喜びがある。(2)
粘土を用いた学習を好む。
幼稚園から馴染みがある。
好きな形が作れる。(6)
丁寧につくり、愛着をもつ。壊したがない。(2)
他の素材と組み合わせもできる。
子供たちの気持ちが安定する。(2)
子供本来の人間的欲求にかなっている。
自由にとりくめる。自由に形が変化する。(4)
手先を使える。
自分の思いを表現しやすい。
短時間で仕上がる、意欲が持続する。

⑥ (指導者) 土粘土がないため、値段が高くたくさんの量を使えない。(4)
中途作品の保存。(14) (紙・土)
技術が伴わない。残土の処理。匂いや触感が嫌いな子どもがいる。
後始末。焼くのに時間がかかる。
一度作ったものを壊さなくてはならない。
たくさんの量を使わせたいが金銭的に困難。(2)

作品の展示場所の確保。教室が汚れる。(3)

粘土の保存に手間がかかる。(15)

こねるのが大変。

ひび壊れる。(6)

準備、後片付け、掃除が大変。時間がかかる。(13)

完成作品の保存。持ち帰らせるが捨てる場合が多い。

壊れやすい。(4)

匂いと衛生面。(油) (4)

乾燥に時間がかかる。(紙)

手を洗うのに時間がかかる。(油) (2)

水道がつまる。

展示場の確保。(3)

焼く場所がない。焼く費用が高価。(2)

形を作れない子の指導方法。また、何を教えたらいいのか。(2)

立体を教えるのが難しい。

高価。(2)

大きな作品の処理 (紙)

型押し的な内容で満足している子供への指導。

粘土の量が少量の場合。(2)

どんな力を身につけていけばいいかはっきりしない。

共同作品が作りたいが、粘土の量が少ない。

(児童) 形が取れない、思ったようにできない。(6)

扱いがうまくできない。ひびがはいる。(3)こわれやすい。(2)

壊すのを嫌がる子がいる。粘土が足りない。友達の作品に触りたい。

思い通りにつukれない。

こねるときが大変。(3)

つめの中に粘土がはいる。

手が汚れる。服が汚れる。掃除が大変。(6)

油粘土の場合単色のため遠くから鑑賞しにくい。

匂いを嫌う子がいる。(3)

立体的につくるとき上手く立たない。立体にならない。(3)

持ち帰りが重い、途中で壊れる。(3)

親が不燃ごみに出してしまう。処理にこまる。(2)

力が要る。

手が十分に使えない。

汚れるのを嫌がる。

管理・保存が難しい。

大きな作品が作れない。(油)

練習を重ねないとひねりだしができない。

⑦土笛・想像した動物、お店屋さん(2年、油粘土)・運動する人(4年・陶芸用粘土)

人の組み合わせ(4年・加工粘土)・土鈴(5年・陶芸用粘土)・秘密の遊び場(3年)・オーケストラを作ろう・皿や茶碗作り(6年・陶芸用粘土)・動物(1年・油粘土)・動物とわたし(2年)・家で飼っている動物(1年)・綱引き(3年)・動物たちの運動会(2年)・建物(紙粘土)・動物ランド(油・1年)・城づくり(2年・紙)・不思議な遊び場(4年)・人物と動物(3年・土)・皿作り(5年・陶芸)・ケーキ作り(2年・紙)、紙粘土で絵を描こう(1年)・二人で(4年)・動きのある人(5年)・動物の親子(2年)動物にのって(3年)・宇宙の動植物・恐竜(5年)・顔(5年・土)・心材をいれた動きのある人物(6年・加工粘土)・好きなもの(1年)・ケーキ・動物(2年)・動物(3年)・塔(4年・紙)・お菓子好きなもの(2年)・無人島の自分(3年)・ペアーになっての動き(4年)・ペンダント(6年・紙)・しりとり(油)・造形遊び(1年)・動きのある人(3年)・お面(紙)・人物(液体粘土・3年)・人綱引き(土)・花瓶(焼成用粘土)・鉄棒してる人(加工)・粘土は友達(1年)・ケーキ(2年)・音楽会に出た私(4年・土)・不思議な生き物(5年)・秘密の遊び場(3年)・植木鉢(5、6年)・私の遊び場(3年・油)・スポーツテストの様子(3年)・二人組み(中学年)・焼き物(5年)・自分の手(1年)・身の回りの「さん」と(4年)・どんぐりなどを用いた動物(2年)・行ってみたい島(1年)・ペンダント(1年・紙)・皿や湯のみ(6年)・つけたしつけたし(3年)・心に残るあの一瞬(6年)・動きのある人物(6年・加工)・お話二人組み(4年)・スポーツする友達(5年)・花瓶入れ物(6年)・自分の顔(高学年)・ストップその一瞬(6年)・食べ物(5年・紙)筆立て(2年・紙)・動物に乗って(3年)・造形(4年)・針金を用いて(5年)・ほえる犬(1年)・茶碗(5年)・楽しく踊る様子(低学年)・将来の自分(6年・紙)・焼き物花瓶土鈴(5年)・動物と遊んだよ(2年)・ひねり出し(1年・土)・器づくり(5年・陶芸)・総合学習土器作り(6年)・ひっぱって!ひっぱって!(2年・土)・茶碗、土鈴(高学年・陶芸)・生き物(低中学年・紙)・器、花瓶(6年・陶芸)・恐竜、動物、店(低学年)・自分の顔(5年)・動作をしている友人(土)・茶碗・花瓶(5年・陶芸)・によきによきの木(1年・土)・お話の登場人物(2年・紙)・土鈴・鉢カバー(5年・陶芸)・顔(6年・土)・恐竜と遊

ぼう(2年・土)・～をする人(5年・土)・猫(3年)・自分と友達(4年)・器入れ物(5年・陶芸)・みんなで動物園をつくろう(2年)・お店屋さん(4年・油)・切って積んで(4年)・種から不思議な木が出てきたよ。(2年・土)・こんなのあったらいいな遊び基地(3年・土)

⑧展示して子どもに返す。家に持ち帰らせる。(64)

(玄関に飾ってあるのをみたことある。)

写真にとって、壊す。再利用。(10)(油・土)

写真にとって、持ち帰る。(9)

鑑賞のあと粘土箱にしまう。再利用。(13)(油、土)

参考作品として展示。(1)

愛用する、飾る。

再利用。(1)

焼成して持ち帰り。(2)

2 「図工の授業」について

①	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ
	69	37	7	29	32	3	16	5	5

② 理由

ア 準備と片付けに時間がとられる。集中してできない。題材が限られる。(12)

子供の思いを大切にすると程時間がかかる。(2)

継続的に時間が取れない。

個人差があり、遅れている子の時間をどう確保するか。(5)

高学年では、仕上げるのに時間がかかり時間内では終わらない。(8)

子供を急がせず、じっくりと取り組ませたいが……。内容を十分に身につけさせられるのか……。(4)

大作に取り掛かりにくい。

毎週2時間確保できない。1時間では少ない。(3)

週に1回しかないのでモチベーションが低下してしまう。(2)

まとめとりをしている。

児童がのってきたところで時間切れになる。

一つの題材で(絵画)1学期が終わってしまう。(3)

行事が重なると、図工の時間が削られることになる。

イ 変わりすぎてきてるのでついていけない。

造形遊びの望ましい実践が、校内で実地されない。(廃品を集めて作品にすれば造形遊びと思っている人が多い)

教科書がないので何をやらせようか、何をすることが子供にとってよいのか考えてしまう。

新しいことへの取り組み。

詳細なものが欲しい。

漫画的な、簡単な題材が多すぎるように感じる。

どの内容がその学年にとって重要なのか精選したいが、校内の体制が不十分で話し合う時間がとれない。(2)

実態に応じた内容の選択。(3)

基礎・基本の定着。

時間が限られているので、何をどれくらいやるか悩む。(2)

子供に意欲をもたせる題材がなかなか見つからない。

如何に少ない回数で短時間でできる題材を考えるか。

能力に差がある。

キ 工作具、材料が人数分足りない。(2)

工作室がない。

備品数が不足し、順番待ちで活動出来ないことがある。

ク 使える時数少ない。(2)

上手く指導できない。(3)

技術が伴わない。

どのように指導したら効果的か教材研究が必要である。(2)

ウ 参考作品が少ない。

まだ、はっきりと取り組むべきテーマが決まっていない。

教科書が2学年単位でまとまっているので、年間カリキュラムをしっかりと立てなくてはと思う。

二つの学年で内容が重複しないように気をつける。

オ 単なるゴミになってしまう。特に工作など。低学年は持ち帰るのが困難。

立体作品の保管場所。(4)

参考作品など保存したいが保管場所が難しい。

ゴミになるもの、簡単に捨てられないものが多い。

良い作品でも、家でのスペースは限られている。

造形遊びをした後の処理。

大きな作品やグループ作品はどうしようか悩む。

親が大切にしてくれない。ゴミにされてしまう。(3)

立体造形など大きなものは家に持って帰るのも大変だし、家でも困るだろうと思う。(2)

エ 教材費が不足。やりたいものができない。(4)

高価。

学年で限度があるため。

限られた金額のなかでどのような活動をさせるか。(2)

共同作品にお金をかけられない。

いろいろな材料が扱いたい、粘土は一題材するなどして諸費を節約している。

保護者の負担。

できるだけ廃材を利用しようとしているが、限界がある。

年間の費用が決められており、多くを図工にまわせない。

良い粘土などは高い。

図工室にある道具の使い方がわからない。(大工道具など)

多様な教材を使用させたいが、教材費では不十分。

カ 何を描いていいかわからない、何を作っていいかわからないという子供が増えている。

消極的な、また嫌がる子にはどう対処するのか。

キ 予算が削られて道具など揃えにくい。

道具不足。

ケ 材料の収集。(2) (発送を広げるものを集めにくい。)

個人の制作時間の差。

教材研究のための時間が確保できない。

基礎・基本。(基本的な力が落ちていて、自分の思い通りの表現画でいない子供が多い)

③ 絵を描く会 49

春の絵を描く会 15

校内作品展(総合展向け) 2

総合展 3

- ④
- ・モノづくりを通して、現実的な感覚や視野を養う。
 - ・体験学習の効果は大きい。
 - ・モノをつくる喜び。工具の扱い。(3)
 - ・手先を使う、モノをつくる、イメージをわかせる、無から作り上げる、全てが生きる力である。(2)
 - ・自分の思いを自信を持って表現できる。(4)
 - ・自分の思いを表現し伝える力をつける。(2)
 - ・自分のつくりたいものを作る心を育てる。
 - ・じっくり丹念に表現する、自分らしさの追求、友達の個性の発見。
様々な作品に触れ、楽しさ良さをみつけ人生を楽しめる。方策を生かす。
 - ・イメージを含ませて心を豊かにする。
 - ・ものを作ることで手先が器用になる。(3) 生活に結びつく。
 - ・作る喜びを感じて欲しい。
 - ・絵を描く際に、描くものをよく観察することで、普段は見逃していたもの等に気づくことができる。
 - ・豊かな感性と自己表現力。
 - ・作る喜びを味わう様子は子供たちの心を開くと思う。生きる力に結びつく。
 - ・生涯学習の基礎になる。
 - ・ものを性格に見る。
 - ・自分らしさを表現でき、他人の良さを認め合うことができる。(2)
 - ・言葉だけではない自己表現が可能。
 - ・発想力が養われる。
 - ・生涯的に楽しむ力。
 - ・自己の発見。表現する力。
 - ・子供を認めてあげられる場と範囲が大きい。
 - ・造形を通して自分の思いを表現する。
 - ・作ったりすることを通して自己を表現、発信する力を育てる。
 - ・知識や記憶力といった、一般的な学習の能力とは別の力を伸ばせる。
 - ・洋服や生活に色使い等のセンスは必要である。
 - ・創造的な力を育成できる。
 - ・友達と協力する態度の育成。
 - ・知と感性を融合させて、自分のものづくりで表現できる。
 - ・言葉や運動が苦手な児童が、他の面で力を発揮できる場の一つ。

- ・心の解放。
- ・作品の鑑賞を通して他者との関わりを深める。(2)
- ・自分の力で色々試すことから、一つのことを成し遂げようとする力がつく。
- ・失敗してもよりよい方法を考えようとする力もつく。
- ・モノをイメージする力が養える。(2)
- ・創造する力、想像する力の伸長を図る。(5)
- ・自分を表現する力を育てることができる。
- ・長い人生のなかで、個人が楽しめる一つになる。
- ・表現力の育成。表現方法の多様性を知る。

Ⅳ 考察

1の項目「粘土造形について」では、まず①の問いでは、図工の授業に時々粘土を用いるという回答がもっとも多かった。この時々とは各学年につき、年間で1回から2回である。理由として、“子どもの興味関心が大きい”を筆頭に、“扱いが簡単である”、“短時間で仕上がる”、“各自持っている”、“常備してある”という手軽さがものを言う場合が大方であったが、中には“感触を味わわせたい”、“指先の刺激になる”、“立体が把握できる”など少数ながら、粘土造形ならではの特質を指摘する意見もみられた。

余り用いない、ほとんど用いないという回答の理由には、“教科書に余り載ってない”というものや、“粘土がない”、“時間的な余裕がない”、“後片付けが大変”、“作品として後に残らない”、“置き場がないあるいは処理に困る”という準備や片付けにまつわる意見が多くみられた。

②の質問では、一番使用される粘土の種類は油粘土で、二番目に粘土、紙粘土であり、続いて、加工粘土と陶芸用粘土となっている。また一部では小麦粉粘土や液状粘土も用いられている。油粘土の使用頻度が高い理由には、“子どもたちが入学のときから持っている”、“取り扱いが楽”、“保存が簡単”、“いつでも使える”、などである。紙粘土については、“軽くて使いやすい”、“工作で用いる”、“色が塗れる”、“安価”、があげられている。粘土については、“立体感をつかめる”、“自由に発想しイメージを膨らませられる”、“感触が良い”、“身体全体を使ってとりくめる”、“土を味わう”、“再利用できる”、“学校に常備してある”が使用の理由である。その他、“加工粘土の利点は壊れにくい”という意見もみられた。また、焼き物で完成させるときには、陶芸用粘土を用いているところが多い。

使用頻度でみると、以上のような結果となったが、油粘土や紙粘土、そして粘土とそれぞれの性質の異なる粘土を、発達段階にあわせて使い分けている学校もいくつか見られた。一般的に低学年では、油粘土がもっとも使用されているようである。高学年になってからは、

焼き物の題材で陶芸用粘土を用いる場合が多い。紙粘土は、工作に用いることから、また粘土も全学年を通して平均的に使われているようである。

⑤の質問では、まず指導者の視点からは、“楽しい”、“集中して静かにできる”、“何度も作り直しができる。子どもが恐れない”、“思い切った作品作りができる”、“形がすぐ変化して面白い”、“手触りベトベトの感じがよい”、“絵よりも表現しやすい”、“感動体験がすばやくできる”、“図工が苦手な子も生き生きと取り組める”、“指先を器用にさせる”という回答が多くみられた。何度もやり直しができることや形が変化しやすいという、粘土の可塑性による利点が粘土造形のよさとなっているが、このことは絵やまた図工の苦手な児童にとっても、抵抗なく自己の表現を可能にする。また、“普段は気づかない能力を発揮する”そして、“子どもの満足感が大きい”などの回答は、子どもの気持ちに答え、潜在的な能力を引き出す力も粘土造形にあることを示しているであろう。指導する立場からは、粘土造形では子どもが失敗を恐れず生き生きと取り組めるという、絵や他の表現方法にはない粘土独自の良さに注目していることがうかがわれる。

次に児童の視点からは、“夢中になれる”、“こねたり・つかみだしたり・ひねりだしたりして作る喜びがある”、“幼稚園から馴染みがある”、“好きな形がつかれる”、“自分の思いを表現しやすい”、“短時間で仕上がる、意欲が持続する”という意見がみられた。この見解からは、粘土は子どもにとって、楽しく夢中になれる材料であり、また子どもの思いと直結した表現ができるため、作る喜びを味わいながら意欲的に取り組める素材であることがうかがわれる。

⑥の質問では、指導者の立場からは、“中途作品の保存”や“粘土の保存”の手間が多数あげられた。また、準備や後片付け掃除の手間もほぼ同数であった。その他、粘土の量の不足や保存、後始末の方法も困難が伴うようである。指導の観点では、“形を作れない子の指導法。また、何を教えたらいいのか”、“立体を教えるのが難しい”、“型押し的な内容で満足している子どもへの指導”、“どんな力を身につけていけばいいかはつきりしない”等、造形に関する指導の方法が不明だという意見が少なくなかった。

子どもの立場からは、“形がとれない、思うようにできない”、“立体的に作るとき上手く立たない。立体にならない”、“力がある”、“手が十分に使えない”、“練習を重ねないとひねりだしができない”等やはり造形活動に関する点が多く挙げられた。また“汚れるのを嫌がる、手が汚れる、服が汚れる”、“つめの中に粘土がはいる”、“匂いを嫌う子がいる”等、衛生面的な内容も目立った。

⑦の質問結果からは、各学年教科書に載っている題材を行っている場合が多いことがうかがわれる。低学年では、動物をテーマにした作品づくりが多い。中学年では、自分と友達など二人組みの対比による構成をとり入れたものなどである。方や、教科書の題材をスライド

せず教師自身が考案した題材、例えば音楽会をテーマにしたもの、も僅かながらみられた。

⑧の質問では、“展示してから子どもに返す。家に持ち帰らせる”という回答がもっとも多かった。その後は、玄関で飾られている例もあるようだが、親にゴミとして捨てられてしまう場合もあるようである。かたや、作品の保存に適さない油粘土や粘土は鑑賞後また写真に撮ったあと壊して再利用するという意見も多数であった。中には、焼成して持ち帰らせるというやり方もみられた。

2の項目「図工の授業」では、①の問いに、一番多かったのが「授業時数」で半数以上が回答している。理由は“準備と後片付けに時間をとられ集中できない”という意見で大方一致しているようである。そのため、個人差に対応できないことや、時間内で作品を仕上げられないという場合が少なくない。時間的な余裕のなさは大作にも挑戦しにくく、こどもの意欲も低下しやすいようである。

次に多かったのは、「内容」であった。教科書に載っている題材の多様さについていけないというものや、子どもの能力差や時間の少なさからどの題材を取り上げたらよいかという選択の難しさなどが挙げられている。新しいことへの挑戦や一方で詳細なやり方や手引きを望む声も聞かれた。また、漫画的・簡単な題材を疑問に思うものや、基礎基本の定着についての意見もみられた。

続いて「作品の処理」、そして「教材にかかる費用」があげられている。「作品の処理」については、どの学校でも作品の置き場所の確保ができないという場合が多い。そして、完成した作品は家に持ち帰っても単なるゴミとして捨てられてしまうという。自己表現の結果である作品が、ゴミとして処理されてしまうのは確かに悲しいものがある。反面、工作などでは社会的なゴミ処理問題を背景に簡単に捨てられないものも多々あり、これからの図工学習は表現する過程と同様にできた作品の処置の仕方まで見通して教材研究をする必要が迫られるであろう。

「教材にかかる費用」は、従来から避けて通れない問題として存在する。“教材費の不足でやりたいものがない”という意見が複数寄せられた。廃材を用いる等の工夫もみられるが、今後は、安価な教材の開発も図工学習の大きな課題となるであろう。

②の質問では、半数近い小学校で「絵を描く会」が学校のイベントとして行われていることが判明した。

③の質問では、様々な意見が寄せられたが、多かったのは“創造する力、想像する力の伸長を図る”や“自分の思いを自信を持って表現できる”というものである。そのほか“ものをつくる喜び”や“ものをイメージする力の育成”等生活に結びつく視点や「体験学習」や「生涯学習」といった現代的な教育目標の視点を合わせて、「生きる力の育成」に図工がもたらす学習効果への期待の大きさや可能性がうかがわれる。

V まとめ

○「粘土造形」について

平均して年に1回か2回の割合で、粘土造形が取り上げられているという結果であった。が、このことは油粘土、紙粘土なども合わせてのとりくみなので、粘土本来の特質である可塑性を生かした粘土を用いた造形はかなり低い実践率と推測される。さらに、取り扱いや保存の面で手間がかからないという理由で、油粘土がもっとも多く使用されている。確かに、油粘土は手軽で便利だが、粘土が持つ触感や可塑性の魅力を十分に味わうためには、やはり粘着的で伸びの少ない油粘土では限界があると思われる。

目的や発達段階に合わせて、用いる粘土を選択することにはもちろん異論はない。それどころか、粘土といっても、紙粘土や油粘土といった加工粘土類と、天然に産する粘土は全く性質が異なるので、是非色々な粘土を使いそれぞれ特色ある造形活動を行うことが望ましい。

だが、その中でも、やや粘土を用いた造形活動が敬遠されるのは、準備と後片付け、また普段の保管の手間がかかるからとなっている。そのほか、特にアンケートの調査では造形の指導方法そのものに関する問題提起も少なくなかった。粘土を用いた造形活動では、どのような指導が求められるのだろうか。その方法、具体的な手段が今ひとつはっきりしていないようである。

例えば、筆者は現在短大の授業にて粘土造形を行っているが、まず油粘土を用意し学生に自由制作を指示すると、できあがってくる作品は細工的で型押し的なものが圧倒的に多い。

次に、一人2キロの天然の粘土を与え、やはり自由制作を行えば粘土の量や質が異なるにもかかわらず油粘土の時と、ほとんど変わらない形状の作品ができあがる。

つまり、ただ粘土を与えただけでは、粘土の可塑性を生かした大胆な塊の魅力をともなう造形活動はできないのである。よって粘土造形においては子どもの自由意志に任せただけでは、一般的に造形が発展しないことのほうが多くみられるため、導入の部分で指導の工夫が要求されると思われる。

以上から、「粘土造形」についての問題点には、特に粘土を用いた場合の準備や後片付けの手間、保管の困難さとそして指導方法の不明瞭さが挙げられるだろう。ただ、アンケート結果にも明示されたようにやはり粘土ならではの、描画や工作的な内容にはない魅力や教育的効果がある。そこで、これら問題となっている手間の軽減や指導法の研究を行い、現場の教師に「粘土を用いた造形」への理解をうながしつつ、そのよさを実践によって紹介していくことがこれからの課題といえるだろう。

○図工の授業について

問題点では授業時数の不足が断突であった、さらに授業時数の削減が造形活動に及ぼしている影響の大きさがストレートに出た結果となった。特に授業時数が減ったことで、取り上

げる内容の選択や子どもの意欲の低下を防ぐ等切迫した課題が突きつけられているといえる。これらは図工の教科の枠組みそのものを覆すような今までにない危機的状況である。また、作品の処理問題や教材費の工面などは、過去より一層厳しい状況となっている。が、新教育課程での教育課題「生きる力の育成」を目指すうえでも想像力そして創造力を養うために、図工科が果たす役割は大きいと思われる。

図工学習を存続かつ発展させるためには、時間配分、題材内容、処理に困らない造形作品、そして安価な教材開発などこれら課題に対応できる図工の授業の研究及び実践が、早急に望まれているといえる。

尚、末筆ながら本アンケート調査は、千葉市立小学校を対象に行っており、結果また考察もあくまでそこから導き出されたものである。そのため、一つの実態としてあるいは大方の傾向としてご理解いただきたい。さらに今後も全国的な規模で引き続き調査を行う予定である。

VI 謝辞

このアンケート調査を行うに際して、さつきが丘西小学校の色部和子先生には多大なご協力をいただきましたこと心より感謝申し上げます。

註

- 1) 本稿での“粘土を用いた造形”とは、特に天然の粘土による造形活動をさしている。また“粘土造形”とは、紙粘土、粘土、油粘土、加工粘土等様々な種類の粘土を用いた造形活動を総じてさしている。
ところで、天然の粘土は「土粘土」と呼ばれ、加工粘土と区別される場合が多いが、表現として適切かどうか疑問なため本稿では「加工粘土」に対して「天然の粘土」という呼び方をしている。
- 2) 上野省策・梶田幸恵「粘土細工から彫塑教育へ」、明治図書、1980年
- 3) 平野節子「いのちをみつめる図工の授業」、学事出版、1990年
粘土の指導は、I 彫塑編でとりあげられている。
- 4) 平野節子、前掲書、p 17-21
平野氏が引用したモーリス・ドベスの言葉は著書「教育の段階」（堀尾照久・斉藤佐和訳、岩波書店）で述べられたもので、以下が抜粋である。
《この年齢の子ども（幼児期の子ども）は、何よりも自分の目や耳や手で考える。身体で考えると言ってもいい。彼にはそれがまだ一番身に合っている考え方なのである。われわれも分別盛りになった時に、全く現実離れした思弁的な思考を生み出す行き過ぎや幻想から身を守ろうと思うなら、このように身体で考える思考を維持しておくべきである。》
- 5) 「ずがこうさく 1・2 上下」「図画工作 3・4 上下」「図画工作 5・6 上下」、開隆堂出版株式会社、2001年

粘土造形学習の今日的情況：その課題と問題点

- 6) 拙稿「新教育課程へ向けての美術教育Ⅰ－地域の特性を生かした図工学習－東金市立源小学校の実践より」、千葉敬愛短期大学紀要第22号、2000、p78－88。同じく「新教育課程に向けての美術教育Ⅱ『環境教育』に照らし合わせて図工教材の研究－“焼却炉が焼き物窯に大変身!!” 東金市立源小学校“焼き物教室2000の実践”より－」、千葉敬愛短期大学紀要第24号、2002、p45－58 参照のこと。